HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小序
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	『鈴木榮太郎著作集６（国民社会学原理ノート）』を出版した際のソースとなった原稿である（同書内での言及による）。 資料作成年不明（システムの制約のため、発行日には没年を入力した）
Issue Date	1966
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77286
Type	manuscript
File Information	X062_01.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小序

~~まだ書き加へたい事項が相当に残って居るけれどもこれで一先づ上梓する事にした。この書は恐らく私の遺稿となるだらうと思ひながら書いて来たので、これが生きて居る間に出版される事が出来る丈でももつけの幸である。~~

昭和二十二年北大に来た時以来私の研究は都市社会に集中した。私の北大に於ける社

常に

て居

今学特殊講義は其後約十年間毎年都市社会学と云ふ同一の~~ぬ~~題~~平件~~で次々と新らしい~~章~~一章か二章づゝを取扱って来たが、終いに三十一年の~~共~~講義で私の都市社会学の体系をなす全十章を一應終へる事が出来た。こゝに公にする本書は右の講義案に少しばかり推敲を加へたものである。

私は北~~大~~海道に来て以来殆どずっと闘病しなければならなかったが、然し少し~~でも~~元気が出れば右の講義案の~~執筆~~作製に~~没頭~~専念した。よい研究をしてよい講義をしたいと思ふ気構へ丈に生

き甲斐を感じ、ておったかすも又それ丈で~~が~~精一杯~~杯止~~であったか、ら私は公私の関係に於いて義理を欠き禮を失する事ばかりであった。北大文学部教授會の~~暖かい~~寛容なる庇護がなければ私のこの研究~~も~~は到底論文完成しなかったものである。

~~この一章の中の論理を完成するまでは死んではならぬと思った事が何度あるか。分らぬ。そんなにして全十章をとにかく完成する事が出来て、それを生かして居る間に上梓する事が出来たのは夢の様な幸である。~~

かんだ

か

私が都市社会学の研究に志したのは終戦直後昭和二十一、二年頃、私が東京でCIEの世論調査課~~の~~に顧問をして居た頃、アメリカの社会学者心理学者、人類学者~~達~~からアメリカの~~社会~~学界~~学~~の現状について色々話しを聞いて居た頃の事である。アメリカでは澤山の社会学者が澤山の分野に分れて皆希望と自信をもって忙しく立ち働いて研究に従事して居る様に思はれた。農村社会学、都市社会学、教育社会学、犯罪社会学、産業社会学、政治社会学、世論調査研究等分

野は~~小分野は~~甚だ多数で、それ等の分野毎に皆或る程度の業績が積まれて居る。社会に関する全般的な理論は貧弱である~~かも知れない~~が、それぞれの分野で少くとも常識を整理した丈の理論は構成されて居り、又実に関する調査研究は次々に活溌に積まれて居る、と云ふのである。考へて見れば私等は実際生活に於ては常識を、しかもそれを何等整理して見る事もしないで判断の基礎として居る場合が頗る多い。◎自分達で判断するのに比すれば~~物指~~や計量器を用ゐる

◎学問の~~確~~世界に於いてもすらさうである場合が多い。

諸学に関する

し、その物指しそれ余りあてにはならぬものかも知れぬ。けれども部分~~の中の座の~~を測定する物差しが充分でないことに[illegible]全依~~る中々むずかしき事であるか。~~を測る物指しかあり得るか正しいある数学的のもの

㊉社会生活の各方面に計量器が用ひられ、様んなれば、それが実際の社会生活に正しい判断の~~基準~~標準を与へると共に、社会の~~機構~~組織を理論にも行政的な前進させるのは当然である。まだ計量器にかけられたことのない法則的なものが、[illegible]社会生活の領の中にはまだ残って居る。

事めは甚だ大きな進歩である。各分野の社會學は（物としての社會事象に關して）

は社會~~事象に關して~~（的實）、~~自分等によつて物を云ふ事を止めて~~

中では少く~~とも單に~~一つ二つ~~物指~~（計量器）を用ひて物を云ふ（觀察ある）丈に（に至つた）

過ぎないかも知れぬが、然しそれは祝すべき進

歩である。（の）社會全般に關する抽象的な統一的

理論には誰も關心がない譯では~~あるまいか~~ない、学

問の世界にも庶民の仕事~~は澤山にある~~に甘んじて從事する者は澤山に居なければならぬ。各分

野における社會的事實に關し周到綿密な觀察

を試みて~~物指し~~（二つ計量器）を用ひて整理しその小さな領

域內に適する概念の整理を~~もたり~~試み傾向性を發

回 もしかしたら、自分自身の判断によつて考へ方は芸術的ななの世界から全く追放される時が来て居るのかも知れぬが

笑ったりする学問的庶民の小さな仕事~~が~~は沢山になければならぬ。~~仕事も自から誇りも夢も来ないことはない。~~誰も~~皆~~彼も大将にならなくてもよい様に、誰も~~皆~~彼も最高の抽象理論にのみ没頭しなくてもよい筈であるよ。殊に足の弱いの大将になるは甚だ危険である。そんな考へ方に今更ら思い至ったと云ふ訳ではないか、それは~~事も~~私~~が都市研究も始めるのも一つの機縁であったと~~には~~本当の~~啓発であった。一つの新らしい活力となった。

それから日本の社会学はやはり日本の学者によってのみ最も正確に観察され得るものと云ふ事である。私は外国人の日本の理解はどんなに進んで居る場合でも決して充分でないことを

＃之等は意識の世界~~の問題~~で出来事であつて、意味は未解決的に（多分に）

仏教的であれ、~~から~~、私共は異国人に依りて意味は甚だ大な度合

の意味~~しかない~~しかない。自分の妻の心すら充分に摑みとり得な

いですらあるではないか。

他村から養子に来た若者に死ぬまで一代の間正式の養子の資

格を認めぬ土地も日本の村落もある。ばあるくあるのである。

嫁の如きは、初めは~~平民が我子の~~[illegible]の伴であつた。

~~外来者であつた。~~他人であつた。村人の~~男~~意味の世界に到達し、なく加入出来

化する為には二代位の共同体験が必要だつた

らしいのである。

◎異国人には越え難い限界がある。※

よく知った。◎日本の学~~問~~者の世界の学界に対する最高の貢献は矢張り日本に（も）存する事実に関する（研究）~~事~~である筈である。~~本~~（少くとも）日本における~~事~~社会的事実の究明は日本人の手によって（こそ）最も正しく遂行される筈である。考へて見れば日本（における）~~の~~社会~~科学~~的な事実にして未だ充分に科学者の眼光の下におかれて（存するの）居ない~~部~~ものは甚だ多い。都市に~~も~~はまだ沢山そんな未踏の領域が残って居る様に思へた。

私は日本の都市に関して若い（日本の）社会学者達が

もっと活発に積極的に調査研究するとよいとは前からも思って居なかったでもなかったけれど、外国人の留学生を活して居ると同時にしきりにその頃その希望が強くなった。そこでその頃よく話す機会のあった若い東大の研究家諸君に都市社会学を勉強する様にしたらどうかとすゝめて見たが皆既に没頭して居る研究があるのでそれは都合が悪い不能だと云ふ事であった。その時私はもう五十を越して居たが、それなら私自身で始めからやって見ようと心に決した。日本の社会学の発展の為には民俗野

人も一人でも多くの一兵卒が研究する事が望ましい~~快楽の~~様に思はれたからである。日暮れて道遠く行き着くまでには斃れるかも知れぬとは当然に思った事である。

私はその頃まで農村社会学の研究に専念して~~来~~居た。その方面の研究事項は次ぎ〳〵に私の興味を惹いては居たが、~~農業~~農村社会学の研究を更に深めて行く意味からもその最近縁の分野としての都市社会学の研究にはもとく関心が無かった譯ではない。~~私は興味があったので~~から関心は常に持って居た。専念する事。（よい機会が出来たと云ふ丈である。）

本来都市社会の研究にはアメリカ人も日本人も多数の学者の業績が（は）既に現はれて居る。私がこの歳をしておくればせに此分野の研究に加入して邪魔になる~~蛇足をかへる~~必要はないのであるけれども私には村落の研究に従事した二十年~~以上~~もの経験がある。その経験で学び得た~~理論~~村落に関する知識はアメリカの都市社会学にも日本の都市社会学にも全く生きて居ない。けれども都市の構成原理には村落の構成原理が無関係である筈はないと云ふ予想が私の頭を去らず、私は都市を理解するに甚だ恵まれた條件をもって居るのかも知れぬと云ふ虫のよい考へさえもおこり、その事が私をして都市社会学

国学の研究に敢然と近かづけた最も根深い原因であつたに違いない。

けれども私は最初は日本及びアメリカに於ける都市社会学者の業績をとつくりと論じ紹介して日本に於ける私なりに考へる都市社会学の問題点丈でも、述べてそれで一応の捨石の役を果したいと思ったのであった。

私が北大にきたのは昭和二十二年九月であったが、その年の十二月に北海道に於ける私の最初の論文として「都市の政治性」と題する一文を草した。これは私が発病する前に書いた都市に関する唯一の論文である。「健民」と題する雑

読のおれ書いたのである。その論文は次の年の五月号に掲載されてあったのであるが、丁度その頃から病床に倒れ、その後長い療養生活に入ったので、その雑誌はまだに見る機会を得ないでいる。何事も混沌無秩序の時代であったからどこかに紛れ込んでしまったのであろうか。

私は物に凝る性分であるから都市社会学を考へ始めればそれ丈に心を奪はれて了った。病院から出てからはもっぱら都市社会学に関する本をよみあさるようになり、曾て農村社会学の

始めから

研究に示唆し与えられ恨れたはもさらであつた

様は単に規模の小さい異常で単純な都市を見本として調査して之れに都市の構造の縮図を見出さうと企図した

果つた事もあつた。けれども此の希望は徒労に終り暗中摸索の時代が暫くつゞいた。（奥井復太郎氏の大著「現代大都市論」をしみ〴〵と読み返して見て、氏著の優れた内容に今更らの様に感服したのもその頃から間もなく、木内信義氏の「都市地理学研究」と磯村英一氏の「都市社会学」が公けにされた。私が拙な小論文を加へて社会学における此方面の発展

私の肉体が病魔に犯されて行くのには無関係に、

のがれ捨てられなる。必要もなかった思った事
れあり。けれども私の研究の興味は燒えさか
るばかりで、都市が複雑であればある丈、都
市に関する（アメリカや日本の）諸学者の理論に残されてゐる問題や
（不満の点）矛盾を見出せば見出す程、私の探究の意欲は
~~益~~（増）して行くばかりであった。けれども私の病気
は生死を往来する様な重態を繰り返してゐた
。都市の社会構造に関する見解が出来た時
はもう死んでもよいと思った。（程うれしかった。）都市の機能を明
らかにする事が出来た時もやはりそうであった。

はない

と

燃

徹底した点

から

うれしかった。

其の後俄かに突破口が出来た様に研究は気持ちよく進んだ。少し勉強しては倒れ、病床生活が相当につゞいて少し元気が出つまづくと~~を取り戻しては~~又執~~筆して何ねして又倒れる~~と云ふ事を繰り返して居た。~~其の十年も完成すればもう死んでももよいと何度思つたかわからない。~~昭和三十年夏から化学療法を用ゐるに及び三十一年春からはもう色々の危険状態はおこらなくなつた。

よくもこの病気に~~耐~~堪えよくもこの一書が完

成したものだと我ながら不思議に思って居る。~~業なかばから~~此本は当然に遺稿~~とし~~から出版されるに違いないから~~正しく~~誤りなく読まれる様にとて~~草稿~~ノートの乱雑な行文を誰にも読み易くする為にいつも心をくばって居た。~~自分で書いた原稿でお出版出来る事は夢の様な幸と思ふ。~~

私は先に社会学の一兵卒の研究として社会の各分野に於ける調査研究に従事する事に建設的な意義がある事を述べたが、私は社会学の研究は社会生活に於ける基本的な構造の究

明と云ふ事に研究者の~~要求~~目標を期待すべきものと考へる事は昔も今も変らないが、その事と社会生活の各分野の調査研究と云ふ事とは矛盾がある様に思へるのであるが、然しそれは根拠なき事ではない。私のこの都市社会学は都市生活~~に於ける~~の基本的な構造~~を~~の究明を企図して居るものである。~~[illegible]~~然し又それは事実に関する調査研究をよそにして論述されて居るもので~~無~~もない。私は都市に関しそんな大それた綜合的処理の一端をこの本の中で果してみやうと試みて

⑥

井賢明な人ばかりの~~沈黙だっした~~シーンとした席上では話しは一向に進まない。一人の男が若が
~~未熟な~~恥知らずの口をきけば話題はそこから進んで行く。
私の氏本様が都市社会学の~~[illegible]~~席上に話題
を作れよ」~~男っ人が若者の衣事が判然出来である~~。
糸口にでもなり得ればと思って居る。

うるのである。~~北大の中谷宇吉郎博士が試みられた雪の結晶の研究と類似するものである。~~

私の都市社会学の研究に國の内外の先輩諸学者に学ぶところが相当に多かつた事は当然であるが、然し私のこの研究に最も力となつたのは私の教室の助手達と学生達であつた。私のこの研究は全くそれらの諸君との協力によつて完成したものである。私の二人の助手笹森秀雄君と富川盛祥君が私の手となり足となり私自身が試みるよりもつと活潑に正確に調査してくれなかつたらこの研究

はとても成就出来なかったものである。

昭和三十二年春

札幌市の寓居にて

鈴木榮太郎識